

2022年度 観光学術学会 学会賞  
受賞作と講評

◆教育・啓蒙著作賞

著者：市野澤潤平編著

書名：『基本概念から学ぶ観光人類学』

出版社：ナカニシヤ出版

出版年月：2022年4月

本書は、観光現象を対象とした文化人類学的研究に取り組む14人の著者による観光人類学の教科書である。「ホスト／ゲスト」、「真正性」、「伝統の創造」などこれまでも数多くの研究が蓄積されてきた概念から、「身体」や「リスク」、「ライフスタイル移住」や「接客サービス」など比較的近年になってこの領域の射程に収められるようになったトピックに至るまで、12の章と5つのコラムによって、観光人類学の多様な研究成果が、初学者にも理解可能な配慮とともに提示されている。

編著者の言葉を借りれば、本書の狙いは「①観光人類学における基本概念を理解する。②それらの基本概念を、観光人類学の知識がない人に、わかりやすく説明できるようになる。③日々のニュースなどで見聞きした、または自分自身が観光旅行において経験したさまざまな事柄について、それらの基本概念を援用しながら、観光人類学の文脈にひきつけて解釈できるようになる」と端的にまとめられる。それに対応して各章のタイトルは、観光人類学を理解するために必須の、あるいは有益な概念や研究対象が簡潔な言葉で提示されている。1章あたり10～15ページ程度で、著者たちの調査をもとにした具体的な事例とともに基本概念が紹介される。各章の内容を十分に理解することができれば、②や③のステップに進むこともできるだろう。

これまでの類書と異なる点として挙げられるのは、本書が観光人類学を単に文化人類学の下位分野としてだけでなく、観光学の下位分野であることが冒頭で明示されつつ、全体が構成されている点である。文化人類学においては近年顧みられることが少なくなった概念やトピックであっても、観光学を構成する他の研究領域、あるいは実務的な関心をもとに観光を学ぶ学生にとっては、観光現象を理解する上で重要なものは数多く存在する。一方で、文化人類学の先端的な理論を導入したとしても、観光現象の理解に、とくに初学者にとっての学びにどれだけ貢献するかは確かではない。その意味で本書では、過去の観光人類学における重要概念と、文化人類学の最新の研究動向や現代観光を象徴する新たなトピックがバランスよく配置されている。もちろん、章によってばらつきがあり、文化人類学を初めて学ぶ観光学専攻の学生にとってはやや難解に映る箇所もあるかもしれないが、それは本書の価値を減ずるものではない。

以上のように、本書は観光人類学を学ぶための教科書として充実した内容の良書となっており、観光学術学会の学会賞「教育・啓蒙著作賞」にふさわしい優れた著作であると評価される。